御書院　雲鶴の間　18 一の間　19 二の間　20 三の間

一の間に床と棚を備え、二の間、三の間が一列に続くため、対面所としても機能したと思われます。移築後、嘉仁皇太子の行啓時には、随従する事務方の主任や侍医が使用しました。襖はすべて雲鶴文様の唐紙であることから、明治天皇が「雲鶴の間」と命名しました。一の間の棚の上の小襖に《海辺春景図》、下の小襖に《海辺秋景図》が描かれています。いずれも筆者と制作年代は不詳ですが、鶴澤派の画風を示しています。

杉戸絵について

八木奇峰《花車図》

杉戸は、2枚1組で廊下の棟境などにはめられる建具です。本丸御殿には、7組14枚の杉戸が遺されており、その一部を展示しています。各棟の建築年代が異なるため、制作年代は、18世紀末から幕末にわたります。杉戸絵の筆者は、室内の障壁画の筆者に加え、長沢芦洲、鶴澤探真、五井友山の名が伝わっています。杉戸には、虎や獅子といった獣、鶴、亀、鳳凰といった吉祥の動物、草花や花鳥などが描かれています。中でも玄関の廊下にはまる大型の杉戸は、「花車」や「舞楽」という宮家に相応しい画題が選ばれています。

台所及び雁の間　21 雁の間 東　22 雁の間 西　筆者：中島来章（円山派）

家来たちが使用した部屋です。雁の間は移築の際に玄関から離れた場所にあった台所と一体となり、現在のような配置になりました。その際に、元は東の部屋の東壁面にあった棚が西の部屋の西壁面に移されるなど、壁面の仕様が変更されました。

《芦雁図》

そのため、障壁画に切り貼りして再編成された痕跡が残っています。水墨で描かれた《芦雁図》の筆者は、円山派の実力者中島来章で、1854年（嘉永7）までには描かれていたことが分かっています。

玄関　23 取次の間　24 玄関の間　25 使者の間

車寄から入ると、玄関の間と取次の間から成る、合わせて約60平米の大空間が広がります。玄関の間は、元は板敷でしたが、移築後に廊下・取次の間・使者の間と共に絨毯敷きになりました。1939年（昭和14）以降に、取次の間と使者の間は元の畳敷きに戻されました。取次の間には、大原呑舟筆《波濤に鷲図》衝立が置かれています。嘉仁皇太子の行啓時には、ここに、大時計やテーブルが据えられ、花を生けた大花瓶や盆栽が置かれました。石敷きの車寄の屋根は、正面が唐破風で、元はこけら葺きでしたが、1909年（明治42）に銅板葺きに変更されました。

玄関の間から取次の間を見る

発行
令和6年8月　京都市元離宮二条城事務所　京都市印刷物　第063034号

京都市 CITY OF KYOTO

元離宮二条城
本丸御殿

二条城の本丸は、1626年（寛永3）、後水尾天皇の二条城行幸に備えて、敷地を拡張した際に設けられました。当時の本丸御殿は、1788年（天明8）の大火で焼失しました。

現在の本丸御殿は、1884年（明治17）に二条城が皇室の離宮となった後、明治天皇の命によって1894年（明治27）に、京都御所の北にあった桂宮家の御殿（桂宮御殿）の主要部を移築した建物です。江戸時代の宮家の御殿で、これほどの規模を残しているものは他に無く、重要文化財に指定されています。明治天皇は、主要な部屋に「松鶴の間」などの名前を付け、「呈寿（ていじゅ）」と書いた額を2階の御座所に掲げさせました。庭園も、明治天皇が草木の栽植等を細かく指示して作らせたものです。

明治から大正時代にかけて、本丸御殿は、嘉仁（よしひと）皇太子（後の大正天皇）と裕仁（ひろひと）皇太子（後の昭和天皇）等の宿泊所として使用されました。室内は、畳の上に絨毯が敷かれ、テーブルと椅子が使用されるなど洋風の設えが取り入れられ、時代と共に、衣桁型シャンデリアなどの照明や電話といった、近代的な設備が整えられました。

江戸時代から近代の宮廷文化の様相を伝える大変貴重な建物であり、室内装飾の障壁画とともに、その優雅な趣を今に伝えます。

桂宮家と桂宮御殿の歴史

桂宮家は、天皇家を支えた四つの世襲親王家のうちの一つです。豊臣秀吉の求めにより、智仁（としひと）親王（1579-1629）を初代とする八条宮家が創設され、9代盛仁（たけひと）親王（1810-11）の時に桂宮と改称しました。

1849年（嘉永2）京都御所の北に整えられた桂宮御殿は、1854年（嘉永7）、京都御所が焼失すると、孝明天皇の仮皇居となり桂御所と称されました。1860年（安政7）、孝明天皇の妹である和宮が14代将軍家茂へ降嫁することが決まると、江戸に向かうまで、その住まいとして使用されました。

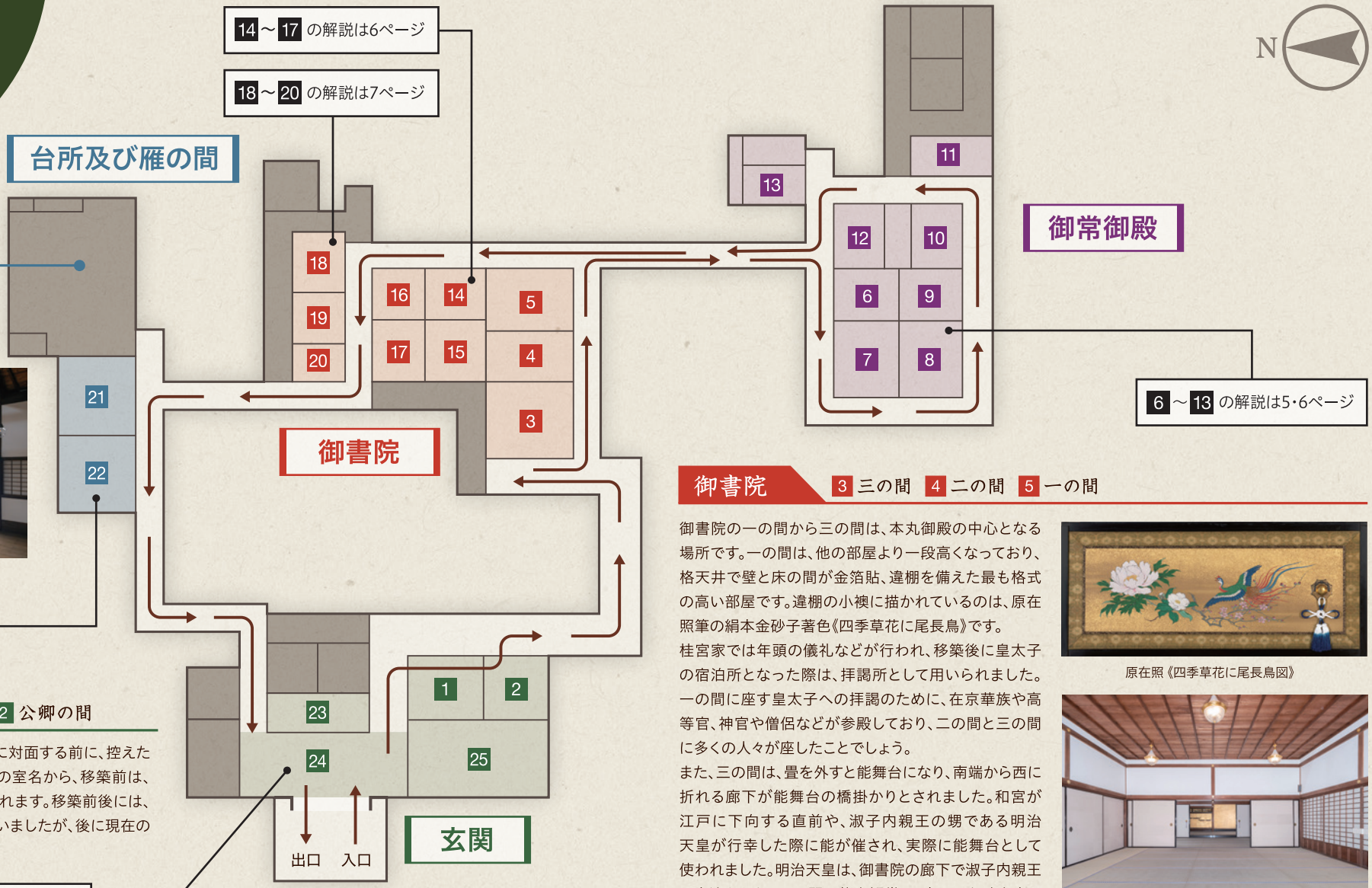
明治時代になると、天皇と華族は住まいを東京に移します。11代淑子（すみこ）内親王（1829-81）は、共に京都に残った45家ほどの華族の中心的な存在として、彼らを支えました。1881年（明治14）、淑子内親王が薨去し、桂宮家は断絶しました。

八条宮智仁親王像　宮内庁蔵

関連年表

	二条城	桂宮御殿
1590年 天正17年		**豊臣秀吉により、智仁親王を初代とする八条宮家が創設される。**
1603年 慶長8年	徳川幕府初代将軍家康により築城。	
1605年 慶長10年		幕府より京都御所の北側に与えられた今出川屋敷地に、御殿を建てる。
1626年 寛永3年	**後水尾天皇の行幸のために城を改修。敷地を拡張して本丸を作り、本丸御殿を建てる。**	
1696年 元禄9年		幕府より京都御所の北東側に与えられた石薬師屋敷地に、御殿を建てる。
1709年 宝永6年		先年に火事で焼失した石薬師御殿が再建される。
1788年 天明8年	**市中の大火により本丸御殿が焼失。**	市中の大火により今出川・石薬師の御殿はともに焼失。
1795年 寛政7年		石薬師御殿が再建される。
1849年 嘉永2年頃	石薬師御殿から御書院を今出川屋敷地に移築。そこに、玄関、御常御殿、台所及び雁の間等を新築して桂宮御殿が完成する。	**今出川屋敷地に桂宮御殿が再建される。**
1854-55年 嘉永7-安政2年		京都御所火災のため、桂宮御殿が孝明天皇の仮御所となる。
1860年 安政7年		孝明天皇の妹、和宮が桂宮御殿に居住。
1861年 文久元年		和宮、14代将軍家茂に降嫁。
1862年 文久2年		孝明天皇の姉、淑子内親王が11代当主となる。
1866年 慶応2年	この頃15代将軍慶喜のための仮御殿が本丸に建てられる。	
1867年 慶応3年	慶喜が二の丸御殿で大政奉還の意思を表明。	
1868年 慶応4年・明治元年	明治天皇が二条城に行幸。城内に太政官代を置く。	
1871年 明治4年	二の丸御殿内に京都府庁を置く。	
1872年 明治5年		桂宮御殿に明治天皇が初めて行幸。以後、明治10年、13年に行幸する。
1881年 明治14年	この頃までに慶喜の仮御殿が撤去される。	**淑子内親王が薨去。桂宮家断絶。**
1884年 明治17年	**皇室の別邸、二条離宮となる。**	
1894年 明治27年	**二条離宮の本丸に、京都御所北側から桂宮御殿が移築され、現在の本丸御殿となる。**	
1895年 明治28年	本丸御殿に、明治天皇が行幸。	
1915年 大正4年	大正天皇即位の大典に伴い、二条離宮は饗宴場となる。本丸御殿は裕仁皇太子が使用。	
1939年 昭和14年	二条離宮が京都市に下賜され、元離宮二条城となる。	

本丸御殿 案内図



台所及び雁の間　台所

食事を準備した場所です。
北側には流し台と水槽を備えています。
通常は非公開です。

台所　南側から北側を見る

玄関　1 殿上の間　2 公卿の間

玄関の各部屋は、来訪者が御殿の主に対面する前に、控えた場所です。殿上の間と公卿の間は、その室名から、移築前は、身分の高い公家が使用したと考えられます。移築前後には、襖等に菊の葉模様の唐紙が貼られていましたが、後に現在のような白張りとなりました。

御書院　3 三の間　4 二の間　5 一の間

御書院の一の間から三の間は、本丸御殿の中心となる場所です。一の間は、他の部屋より一段高くなっており、格天井で壁と床の間が金箔貼、違棚を備えた最も格式の高い部屋です。違棚の小襖に描かれているのは、原在照筆の絹本金砂子著色《四季草花に尾長鳥》です。
桂宮家では年頭の儀礼などが行われ、移築後に皇太子の宿泊所となった際は、拝謁所として用いられました。一の間に座す皇太子への拝謁のために、在京華族や高等官、神官や僧侶などが参殿しており、二の間と三の間に多くの人々が座したことでしょう。
また、三の間は、畳を外すと能舞台になり、南端から西に折れる廊下が能舞台の橋掛かりとされました。和宮が江戸に下向する直前や、淑子内親王の甥である明治天皇が行幸した際に能が催され、実際に能舞台として使われました。明治天皇は、御書院の廊下で淑子内親王に出迎えられ、一の間で能を観賞し、宴のひと時を楽しみました。

原在照《四季草花に尾長鳥図》

御書院　三の間から一の間を見る

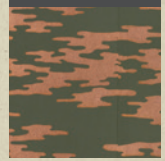
唐紙

唐紙とは、胡粉入りの絵具を塗った表面に、版木を使って文様を摺った紙のこと。古代に中国から伝わったとされ、古くは文章を書くための料紙として、後に、襖や壁の表装に用いられるようになります。
江戸時代までの京都は、その生産・流通において、随一を誇りました。本丸御殿では、御書院と御常御殿の各所で、唐紙を使った表装を見ることができます。いずれも、白地や緑青地に七宝や鶴、雲などの文様を黄土や雲母、銀砂子を用いて、繊細かつ雅やかに、部屋や廊下を彩ります。

白地大七宝

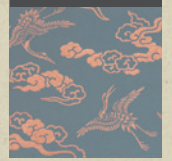
御書院　廊下

緑青地朽木雲



御常御殿
化粧の間、御納戸等

緑青地雲鶴



御書院　雲鶴の間

本丸御殿障壁画の筆者たち

本丸御殿では、江戸時代後半に京都で活躍した様々な流派の障壁画が見られます。
室町時代から続く狩野派の流れをくむ鶴澤派と京狩野、円山応挙を祖とする円山派、またその影響を受けた四条派、岸派、原派などです。その多くは京都御所の障壁画制作にも参加しました。

御常御殿　松鶴の間

御常御殿 6 ～ 13

御殿の主の居室や寝室を備える棟です。障壁画は、1862年（文久2）、淑子内親王が桂宮家の当主となるにあたって、描かれたとされています。

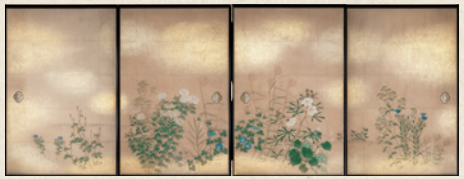
6 耕作の間　筆者：中島華陽（岸派）

障壁画は、西面に春の田起こしと浸種、南面に夏の田植え、東面に秋の収穫の風景を描きます。稲作と農村の様子を描く「耕作図」は、権力者が民の様子を知り、自らを戒めるために制作されました。

《四季耕作図》

7 四季草花の間　筆者：中島来章（円山派）

移築後は、皇太子等の食事の部屋としても使われた部屋です。障壁画は、南面にタンポポや菜の花等の春の花、菖蒲や河骨などの夏の花を描き、東面には薄や蜀葵、菊や竜胆など秋の花、北面にはツワブキ、寒菊、水仙など冬の花を描いており、部屋全体が四季の花で囲まれています。



《四季草花図》

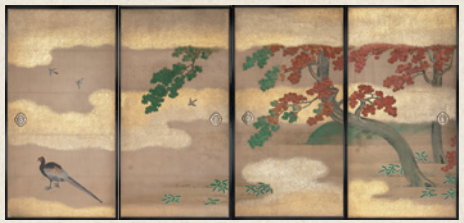
8 松鶴の間　筆者：狩野永岳（京狩野）

「御座の間」や「御座所」とも呼ばれる部屋で、御殿の主の居室です。「松鶴の間」は明治天皇によって名付けられました。障壁画には、金銀砂子で雲が表され、床の間と襖には、松と鶴が、棚の下部には亀が描かれています。松、鶴、亀は長寿を象徴するモチーフです。筆者は、京狩野家の9代目当主、狩野永岳で、濃密で華麗な画風には、狩野派の伝統が受け継がれています。

《松鶴図》

9 雉子の間　筆者：長野祐親（京狩野）

「御寝の間」とも呼ばれる、御殿の主の寝所です。明治天皇により「雉子の間」と名づけられました。部屋の四隅の柱には、蚊帳を吊るための金具があります。障壁画は、部屋の正面と右側に、紅葉や雄の雉子、萩など秋の景物が、左側の壁面には、桜と雌の雉子、雛など春の景物が描かれます。筆者、長野祐親は、狩野永岳に師事した絵師です。



《春秋花鳥図》

10 御納戸

御殿の主の身の回りの世話をする者が控えた部屋と考えられます。移築後、嘉仁皇太子行啓の際には、侍従の部屋として使われました。壁や襖には、緑青地に朽木雲文様の唐紙が使われています。

御納戸

※障壁画がある部屋は、部屋名の後ろに筆者名を記しています。

11 御化粧の間

御殿の主や身分の高い女性の身支度に使用された部屋とされます。北側には、棚と押し入れが設えられていて、身支度に使う物を入れたと考えられます。壁や襖には、御納戸と同じ緑青地に朽木雲文様の唐紙が使用されています。

御化粧の間

12 萩の間　筆者：八木奇峰（四条派）

御殿の主のそば近くに仕えた人が使用したと考えられます。障壁画には、満開を迎えた萩の花が部屋全体に描かれ、清楚ながら華やいだ空間となっています。

《萩図》

13 御湯殿

御殿の主の浴室です。畳敷き部分は控えの間で、一段下がった板間の床は、中央に向かって勾配が付いていて、溝を通じて排水できるようになっています。板間に浴槽を置き、湯浴みしたと考えられます。

御書院　四季の間 14 ～ 17

春夏秋冬の景物を描く四つの部屋が田の字形に配置されます。春の間の違棚小襖に和歌の神様である住吉社を描くことから、和歌の遊びが行われたとされます。春の間と夏の間の境には、卍崩し形の欄間が入ります。廊下と夏の間の境には竹の節欄間が入る珍しい形式です。建築年代は寛政期（1789-1801）とされますが、障壁画の大半は1863年（文久3）以降に制作されました。

14 夏の間　筆者：伝多村挙秀（円山派）

夏の農村の情景が描かれています。春の間との境の襖の中央には、田植え作業と水田が描かれています。南側の壁面に、柳が群生する水辺に小舟に乗る二人の人物、冬の間との境に柴を集める老人が見られます。

《夏景図》（部分）

15 春の間　筆者：円山応立（円山派）

床と違棚を備える四季の間の主室です。床、壁、襖には、円山応立が松と満開の山桜が点在する丘陵を描きました。違棚の小襖《住吉図》と《貝図》は、寛政期に復古大和絵派の田中訥言が描いたと考えられます。

《春景図》（部分）

16 冬の間　筆者：伝星野蝉水（円山派）

雪深い山間の農村が描かれています。白い雪に松などの木々の緑と水辺の藍色が映えます。筆者と伝わる星野蝉水は、円山応立の弟子で、明治時代に、二の丸御殿障壁画の補彩の作業にも携わりました。

《冬景図》（部分）

17 秋の間　筆者：岸竹堂（岸派）

秋の山水が描かれています。ところどころに紅葉した木々の葉が見られ、春の間との境の中央付近にはつがいの鹿がいます。西側の腰障子には、刈入の終わった田、稲架と稲束を運ぶ牛と人が描かれています。

《秋景図》（部分）